

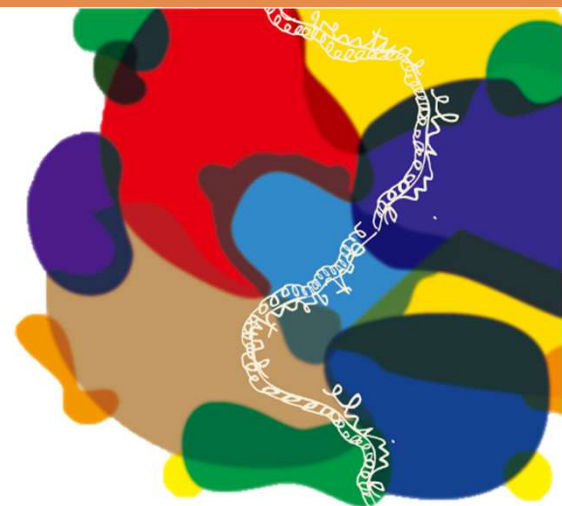
愛媛県×東京藝術大学連携プロジェクト アートベンチャーエヒメの取組みについて

アートベンチャーエヒメ（愛媛県×東京藝大連携プロジェクト）

◆アートベンチャーエヒメとは

愛媛県と東京藝術大学が令和5年1月に締結した包括連携協定に基づき、アート（文化芸術）を介して人々や地域とのつながりを深め、新たな価値や関係を生み出し、“愛媛の未来を創造する”ことを目的としたアートコミュニケーションプロジェクト「art venture ehime」を展開。

- 少子高齢化による人口減少が進むなか、プロジェクトの主体となるアートコミュニケーター「ひめラー」を中心に、愛媛県と東京藝術大学、地域の人々が協力し、福祉やスポーツ、観光、食、まちづくりなどのさまざまな分野にアート（文化芸術）を取り入れ、地域の課題に取り組む。
- 「art venture ehime」の取り組みを広く周知し、より多くの方々が文化芸術に親しみ、参加できる機会を創出することを目的として、県内4エリア、8ゾーンを会場に、県民参加型のアートフェスティバル「art venture ehime fes 2025」を開催。
- 文化芸術、スポーツ、学びの場として幅広く活用されている「とべもり+（プラス）」をはじめ、地域のさまざまな拠点を舞台に、多様な表現の場を提供し、創造的な交流を促進。



art venture ehime fes 2025

◆art venture ehime fes 2025の概要

- 主催：アートベンチャーエヒメ（愛媛県、東京藝大）
- 期間：2025年10月18日（土）
～11月3日（月・祝）17日間
- テーマ：「ここにある豊かさ」
- 会場：とべもり+（プラス）4施設をメイン会場、
砥部町エリア・今治市エリア・内子町エリアの
4つのサテライト会場
- 参加アーティスト：オープンコール（公募方式）
295組、334作品から選ばれた23組＋招待1組
計24組が展示型・体験型の作品を展開
- 連携プログラム
えひめ愛顔の子ども芸術祭2025
障がい者芸術文化祭（パラアートえひめ2025）ほか



art venture ehime fes 2025

本プロジェクトでは「ここにある豊かさ」をテーマに、有名アーティストが作品を設置して集客するというイベントではなく、準備段階からのプロセスに重きを置き、アーティストやひめラーが地域住民とともに地域の魅力をより深く掘り下げ、プロセスとともに可視化し、体感できるプログラムを展開。

◆アートコミュニケーションブックの作成

- フェス開催の前年には、各会場のキーパーソンに「ひめラー」がインタビューし、地域の魅力を掘り下げて紹介するアートコミュニケーションブックを作成し、フェス公式noteで公開。



ひめラーが各エリアの魅力をリサーチ

◆アートコミュニケーションツアーの実施

- フェス参加アーティストの公募に当り、アーティストにより深く地域を知って頂く取り組みとして、各会場をひめラーと関係者が案内するアートコミュニケーションツアー（下見ツアー）を実施。



ひめラーが各会場の魅力をアーティストに紹介

art venture ehime fes 2025

本プロジェクトでは「ここにある豊かさ」をテーマに、有名アーティストが作品を設置して集客するというイベントではなく、準備段階からのプロセスに重きを置き、地域住民がひめラーやアーティストとともに地域をより深く掘り下げ、プロセスを可視化し、体感できるプログラムを展開。

◆積極的な広報・パブリシティ活動を展開

- 公式ガイドブック10万部発行。作品ではなく、アートコミュニケーションブックをベースとした地域とアーティストの活動を紹介したガイドブック。
- 県内全ての小学校及び、地元中学生・高校生（砥部町・今治市・内子町・伊予市）へ全人数分配付。
- 公式HP及びインスタグラムで関連イベントも含めて周知
- 美術手帖、Casa BRUTUSなど全国的な芸術系雑誌を招致し、砥部ミュージアム通りゾーンを含む各会場を紹介。



「私たちが暮らす地域は、自然豊かな環境に恵まれています。その環境を大切にし、地域を活性化させるために、アートを活用した様々な取り組みを行っています。本フェスは、地域住民がアートを通じて、地域をより深く知り、愛着をもつきっかけとなることを目指しています。」



◆フェス会期中、周遊バスツアーを催行

- ・フェス会場周遊バスツアーを全16回実施。約300人に対し、フェスの魅力を効果的に紹介。うち2回は旅行業者の自主事業としてディレクターによるプレミアムツアーを開催。

◆市町実施プログラムへの側面支援

- ・市町が実施するソフトプログラムを含めたフェス開催に伴う事業企画の打合せ段階から伴走し、多方面で参画・支援。



フェス期間中開催されたイベント①



きく12年

小田の人々が、1978年の秋祭りの様子が収められたホームビデオと共に愛媛大学井口梓教授の研究所を訪れた出来事が、その後12年に及ぶ小田の人々と井口研究室との関係のはじまり。井口研究室が12年きいてきた声、その12年をひめラーが井口教授や地域の方々から聞き取りながら、その活動が小田にどのように“きいて”きたかをひもとくクロストークイベント。井口教授が担当するひめラー講座を通して、ひめラーが企画実践した「ひめラボ」プログラム。

- 開催日：10月19日（日）
- 登壇者：アーティスト井口梓（愛媛大学社会共創学部教授）、ひめラー、小田地区の方々、井口研究室卒業生



アシさとクラブ みちくさんぽ × art venture ehime fes 2025

アートと古墳をめぐる 11月2日（日）10:30 - 12:00

愛媛県総合運動公園ゾーンにてアート作品と、
古墳群を歩きながら体感できるウォーキングツアー！

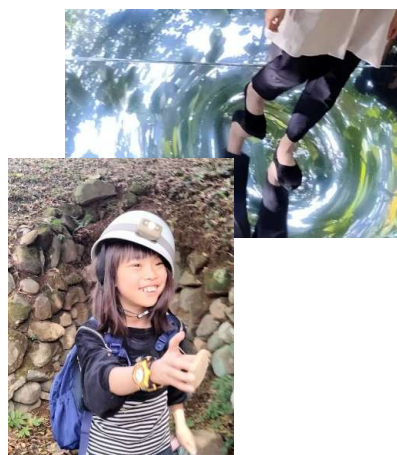


みちくさんぽ × artventureehimefes2025 アートと古墳をめぐる

（株）アシックスが展開する「アシさぽクラブ」との共催イベント。愛媛県総合運動公園ゾーンにて考古学とアートのプロフェッショナルと一緒に、古墳群をお散歩ウォーキングしながらアートと歴史にふれ、新たな魅力を体感するイベント。

アートを通じてとべもりという場を持つ時間の蓄積を身体で感じるプログラムとなった。

- 開催日 / 11月2日（日）
- 時間 / 10:30~12:00
- 会場 / 県総合運動公園
- ガイド：愛媛考古学協会 会長 岡田敏彦 / アシさとクラブ 山田裕也・笹沼隆



フェス期間中開催されたイベント②



PROJECT EAT × ART

食と行為の実験的レストラン“KNEW DEAL NEW MEAL”



定員20名に対して2時間だけひらかれる特異なレストラン“KNEW DEAL NEW MEAL”。これまでに何度も体験してきた「食」にまつわる約束事を、「行為」をテーマに解体拡張する場を作る。本プロジェクトでは、食でつながる-をテーマに活動を広げるLOOPの「食」と、松山を拠点に活動するコンテンポラリーダンスカンパニー、ヤミードンスによる「行為」を交錯させながら、食のプログラムを展開。



- 開催日：10月19日（日）
- 定員：20名
- 場所：県総合運動公園体育館前ピロティ

アートコミュニケーター

「ひめラー」と一緒に 砥部町の大南地区を 巡りませんか？

陶街道ARスタンプラリー12 ツアー

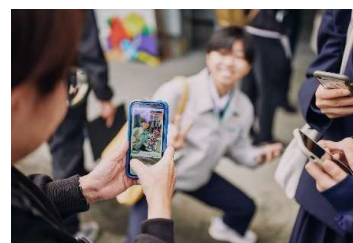


陶街道ARスタンプラリー12ツアー



art venture ehime fes 2025に合わせて陶街道ARスタンプラリーのスポットを砥部分校と（株）オートクチュールによって追加。

砥部町の魅力をアートコミュニケーター「ひめラー」のガイドのもと、ARで体験してもらうといった内容。



- 開催日：11月1日（土）
- 開催場所：作品展示会場
（JAえひめ中央砥部支所 倉庫）
- ガイド：・首藤喬一（ひめラー）
・安野雅也（株式会社オートクチュール）
・art venture ehime fes 2025 ガイド
- 製作：松山南高等学校砥部分校デジタルクリエイション部・株式会社オートクチュール

フェス期間中開催されたイベント③



ひめラー企画「間（あわい）遍路ってなんなん？」



「あわい遍路」とは、art venture ehime fes 2025の会場から会場をつなぎ、お遍路にまつわるスポットを通して、文化と地域を知る“もうひとつのお遍路のカタチ”。

アートとお遍路の「人の心を動かし、豊かにする力」という共通点に着目した企画。

ひめラーが愛媛県の札所やお接待所など、土地に根づいた人々の営みを紹介しながら、「お遍路 × 地域 × アート」が交わることで生まれる体験を通して、フェスのテーマ「そこにある豊かさ」を、より深く感じてもらう企画。

■開催日：10月24日（金）

■開催場所：酒蔵はつゆき

関連イベントとして広報連携



「真民さんのまなざし～真民さんがみつめていたもの～」展

坂村真民の生き方を考察し、そこから分かることは、どんな時代にあっても、変わらない「人間としての生き方」というものを常に考えて、日々自分の生き方を反省し、自分を厳しく戒め、「今日よりは、一歩でも前に進む生き方」を心がけていたこと。

今回の企画展では、「真民さんのまなざし」について多面的に取り上げ、「世界を見つめるまなざし」から「生きとし生けるものへのまなざし」、「家族へのまなざし」、「人間として生きるためのまなざし」という観点から詩を選び、そこで真民さんが何を書き、何を訴えているのかを解説・展示している。

■開催日：10月11日～3月1日

■場所：坂村真民記念館

■主催：砥部町、坂村真民記念館

参加アーティスト①

◆落合 陽一 × 笹村白石建築設計事務所(XSA) (日本／東京・愛媛)



色²池：空を溶かす、 1500年の眠りの鏡

◆落合 陽一はメディアアーティスト。境界領域における物化や変換、質量への憧憬をモチーフに作品を展開。筑波大学准教授、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）シグネチャーパビリオンプロデューサー。

笹村 佳央 / 白石 洋子（XSA）は、笹村白石建築設計事務所の屋号で、Xは掛け算を、Sは笹村と白石を、Aは建築を意味し、「建築は、建築家と他分野プロフェッショナルとがコラボすることで、乗算的に面白くなる」という思想を表現する。

1500年の時を越え、古墳の森に現れる鏡。空や木々、人々を映し、波紋のように揺らめかせる。かつての夢「水の上を歩く」ような体験を、次世代の子どもたちに叶えてみたい。

◆長谷川 隆子（日本／香川）



◆切り絵作家。京都市立芸術大学大学院修了。香川大学非常勤講師、芸術士®。アメリカでの作品発表を皮切りに活動を広げ、帰郷を機に四国の手漉き和紙文化に出会う。巨大な紙を用いた緻密な切り絵と光を融合させ、場所の記憶や気配を表現するインスタレーションを展開。

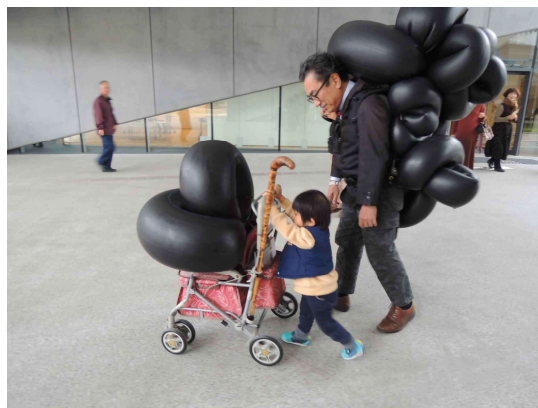
「その場所でしか生み出せないもの」を軸に、歴史や風土、人々の願いを作品に映し出す。パフォーマンス作品では、切り絵が織りなす光と影に、身体表現を重ね、新たな物語を創出する。瀬戸内国際芸術祭の関連事業や、かがわ・山なみ芸術祭などに参加。愛媛県四国中央市出身。

まなざしの森

かつてインドゾウが暮らしていた空間に、切り絵を用いて光と影を交えながら展開するインスタレーション。動物たちの気配と命の記憶を浮かび上がらせる。

参加アーティスト②

◆坂井 存+TIAR（日本／福岡）



◆1948年福岡県久留米市生まれ。日本の典型的な団塊世代ビジネスマンとして働くかたわら作家活動を開始。
1996年よりゴムチューブ巨大彫刻を美術館やギャラリー等で発表。1999年より作品を背負い各所を訪れる
《重い荷物》ストリートパフォーマンスを開始。国内・世界各所でパフォーマンスを行う。

世代/年齢、身体、ビジネス、環境問題、生活者視点等、多様な切り口で表現活動を行う。近年は美術以外の領域に活動の場を広げている。

あなたの重い荷物は なんですか？

人生の重さをカラダで感じてみよう！はちきれんばかりのエネルギーに満ちたゴムチューブのオブジェ「重い荷物」を背負ったり、カートに乗せて押したり。大人だってこどもだって老人だって、生きていくのはたいへんだ。でも不思議。背負うとなぜか笑顔になる。

◆杉原信幸 × 中村綾花（日本／長野）



◆2010年より毎夏、「信濃の国 原始感覚美術祭」を主催するNPO 法人原始感覚舎の理事長、美術家の杉原信幸は2019年、ACCのフェローシップで8か月間の台湾原住民調査を行い、2022年、文化庁新進芸術家海外研修員として1年間のインドネシア、マレーシア、シンガポールの先住民調査を行った。

杉原信幸と帽子作家の中村綾花のユニットとして、2025年、Joy of Weaving-REpair、SüdpART ビエンナーレ（ミュンヘン）、2024年、福岡アジア美術館AIRに参加。土地の素材を繋ぎ、土地の記憶を甦らす造形を行い、生活とアートが分けられる以前の生活と美しさのともにある文化を呼び覚ます。



おたるがした

愛媛県の民話「おたるがした」は津波から山に逃げた村人が、巨大な樽を見つけ、子どもがトンマな巨人の忘れ物と言うと、村人は笑い出し、復興することができたという話。枝や流木を使って、巨大な樽と波を表現する。

参加アーティスト③

◆林靖格 [Ching Ke Lin] (台湾)



◆台湾の現代アーティストであり、長年竹を用いたインスタレーションに取り組み、国際的にも作品を発表しています。彼は好奇心を持って竹の生命哲学を探究し、伝統的な竹編みを実用性から解放し、分解と再構築を通じて現代的な意義を与えています。彼の大規模な没入型作品は、工芸と美学を融合させ、鑑賞者を素材・空間・光の感覚的対話へと導きます。

UNIQLO、Mercedes-Benz、New Balance、能作、北港武徳宮などのブランドや文化機関とコラボレーションし、竹芸術を建築、公共芸術の分野へ展開しています。各作品は生命の本質への思索と伝統知の革新を体現しています。現在、ニューヨークのFremin Galleryに所属し、竹芸術の新たな可能性を切り開き続けています。



倉波青漾

砥部焼の藍の筆致や、唐草紋様に着想を得て、竹編の円形編みで空間に流動する線を描きます。陶と竹、伝統と現代を結び付け、「再生」と記憶の共有を体現する作品です。

◆来島会 with 瀬戸内サーカスファクトリー (日本／愛媛・香川)



◆愛媛県今治市を拠点として障がいのある方の活動を支援している「社会福祉法人 来島会」と、香川県高松市を拠点とする現代サーカスのプロ集団「一般社団法人 瀬戸内サーカスファクトリー」の合同チームです。

世代や障がいの有無を超え、誰もが交じり合えるサーカスパレードを、美術家 KOSUGE1-16 土谷享さんや、音楽家 片岡祐介さんをはじめとするアーティストも参加しながら皆さんと一緒に創ります。

今治里山に サーカスパレードが やってくる

里山にふらりと現れたメリーゴーラウンドと、アートな動物たち。サーカスパフォーマンスに地域のみんなが加わって、ゆるやかで賑やかなパレードが山あいを練り歩く、誰もが主役のお祭りです。

参加アーティスト④

◆キャズ・T・ヨネダ（日本/東京）



◆生まれ育ちもアメリカ西海岸。コーネル大学建築学部卒、ハーバート大学院GSD修士課程修了。現在では、法政大学兼任講師と日本女子大学建築デザイン学部でKazLabを設立し特任准教授を務める。

代表作に、ドキュメンタ(13)や21_21デザインサイトで展示されたShenu、そして未来の物流倉庫Protoや緑青荘など建築とアートを行き来する活動をしている。



丹下健三頌：発露のキセキ

常に未来を見据えつつも歴史の大河を自覚しながら建築と都市を創造し続けた丹下健三氏へのオマージュ。彼の建築は、人類の絶え間なく展開する大叙事詩から切り離せられる断片的な存在ではない。古典から現代への軌道を導いた、見え隠れする関係性を顕す潜在的な序曲の可能性を、国内外の歴史と伝統を熟知した丹下氏が記憶に蓄積していた先例をもって、彼の根幹にある建築的思考の過程を実験的に身体化してみたい。

◆井口 梓（日本／愛媛）



◆1978年徳島県生まれ。香川県で育ち、茨城県つくば市で学生生活を過ごした後、2009年から愛媛大学への着任をきっかけに松山市に移住。専門は地理学・博士（理学）。

愛媛県内を中心に、人口が減少しつつある地域にて、人々の記憶や経験から構成される無形文化資源の記録・収集とその活用（文化資源マネジメントやまちづくりなど）に取り組む。2024年から、愛媛県・東京藝術大学と連携し、アートコミュニケータ「ひめラー」育成のためのプログラムを担当。



つむぐ

「つむぐ」とは、人の記憶や言葉を通して歴史をつむぎ、人々の想いを未来につむぐ作品。地域の歴史を一人ひとりの記憶や経験の集合体として捉え、それらを集めた大きな布で、時間を越えた歴史の重なりを可視化する。

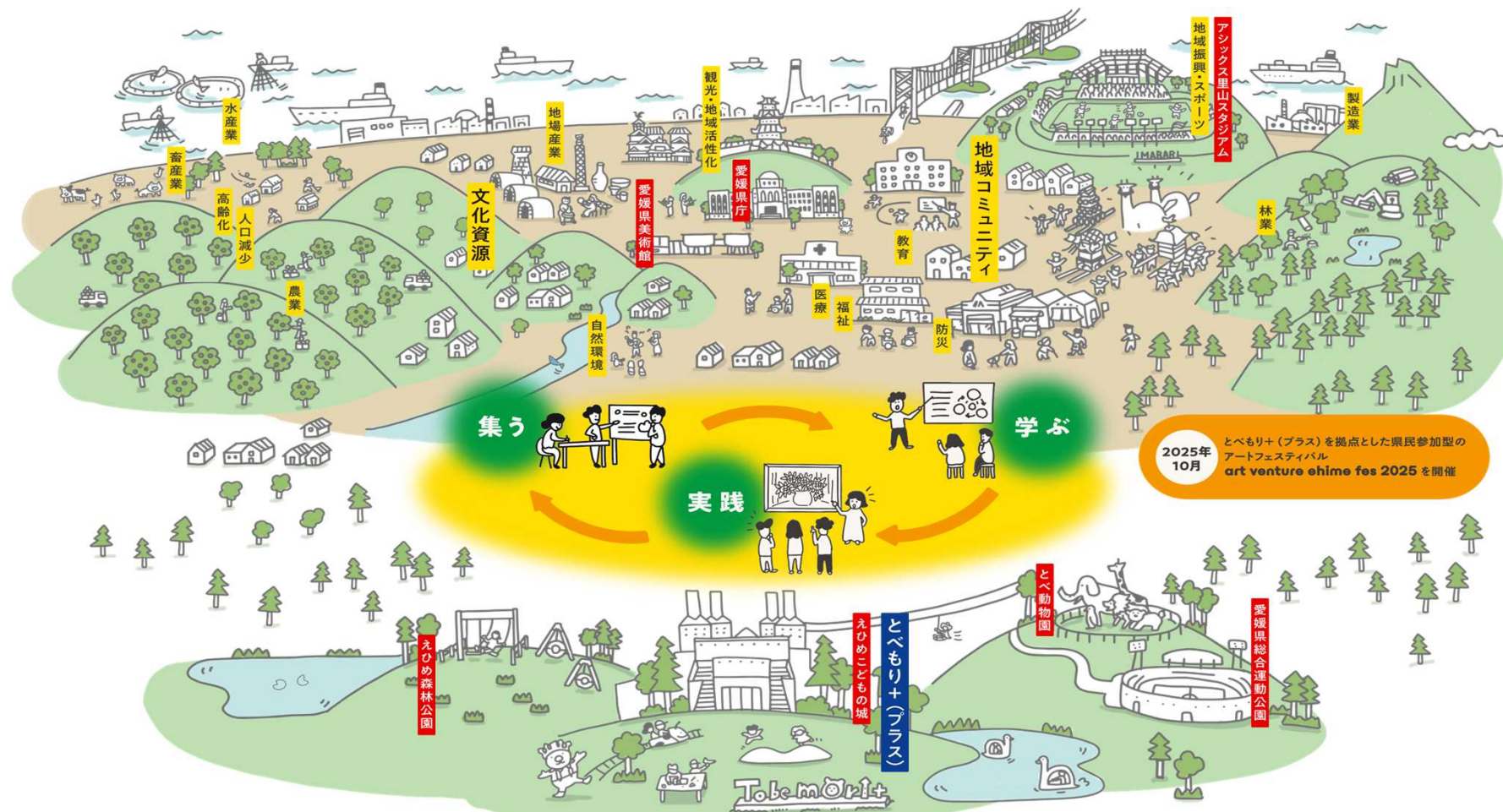
ひめラーについて①

◆アートコミュニケーター「ひめラー」について

- ・人々と地域をアートでつなぐ、アートコミュニケーターとして「アートベンチャーエヒメ」の枠組みで活動
- ・多様な背景を持つ人々が集い、アートを介したコミュニケーションづくりについて学ぶことと現場で実践することのサイクルから、人や地域を結びつけるアートコミュニティを育む
- ・アートベンチャーエヒメフェス2025では、地域や来場者とアーティストとの橋渡し役として活躍
- ・フェス開催の前年には、各エリアのキーパーソンにインタビューし、アートコミュニケーションブックを作成



ひめラーについて②



県内をフィールドとして、文化資源や地場産業、地域コミュニティなど様々な領域にアート（文化芸術）を掛け合わせ、地域が抱える課題に県と東京藝大、県民が連携して取り組む

アートコミュニケーションブック①



えひめこどもの城 / 園長 敷村一元さん × NPO法人とべ子育て支援団体「ぽっかぽか」 代表理事 村上明子さん



愛媛県立とべ動物園 / 園長 宮内敬介さん



思いと縁がつながる 私たち子どもたちの居場所

「えひめこどもの城」は2025年10月24日に開園27周年を迎える、全国に18カ所ある大型児童館の一つ。中四国で大型児童館があるのは香川と「えひめこどもの城」だけです。児童館は0～18歳の子どもの地域における育ちを支える場ですが、すべての人が楽しめる場所でもあり、幼稚園や小学校の遠足から、ご年配の方の散歩まで様々な方が利用されています。

デートや友だち同士でも、また来たいなと心から思える場所になりたいと思っています



人と動物の共生を考える いのちの博物館

1988年、動物たちが自然に近い環境で生活できるように松山市から砥部町に移転し、新たな動物園「とべ動物園」が誕生しました。

とべ動物園が目指すのは「命の博物館」です。私たちは、新しい命を迎えることをみんなで祝う一方で、死という現実もしっかりと伝えています。限りある命の大切さを感じてもらうことが、動物園の使命だと考えています。また、人と動物が互いに尊重し合い、共に生きることを考えるきっかけとなる場所でありたいと思っています。



アートコミュニケーションブック②



坂村真民記念館 / 館長 西澤孝一さん

いのちを尊び弱きものに寄り添う
生きるための道標となる珠玉の詩

「念ずれば花ひらく」で知られる詩人・坂村真民の詩の世界、そして人柄を知ることができる記念館です。

全国から足を運んで下さり、詩の前で立ち尽くす方、涙を流している方もいらっしゃいます。真民の詩には、人々に生きる希望や勇気を与え、前向きな気持ちにさせてくれるような力が宿っています。生前書いていた日記はノート796冊。日々の出来事や詩を書く過程が綴られており、私は毎日このノートを開き、年3回の企画展の構成を考えたり、真民の詩を読み解くヒントを求め、真民と対話を重ねています。このノートを読むたびに、真民は人としてどう生きるかを時に優しく、時に厳しく問いかけてくれるのです。



砥部焼伝統産業会館 / 館長 門田巧さん

砥部焼をより深く知ると
“今”がもっと面白くなる

砥部焼の歴史資料館として意義が深い施設です。6～7世紀の須恵器の窯跡が町内の大下田古墳から発見されたことや、奈良・平安時代には「伊予砥」と呼ばれる砥石が広く知られ、東大寺の「正倉院文書」に記載があるなど、古代から砥石の生産が盛んな土地でした。砥石くずが焼き物の原料となり、近隣の山にある燃料資源が豊富なこと、そして杉野丈助が1777年に磁器焼成に成功したことから砥部焼が誕生しました。当時の窯道具から原材料、歴史的価値のある作品も並び、さらに現代作家の作品まで見られます。

砥部焼のルーツ、磁器創業からもうすぐ250年を迎えようとしています。その歴史と、現代作家たちの作品の魅力、両方を見に来てください。



アートコミュニケーションブック③



丹下建築ゾーン / 一級建築士 大野順作さん



1950～90年代までの丹下建築群が見られる 世界唯一の場所

今治に丹下建築が建てられるようになった始まりは戦後1958年に建てられた市庁舎と公会堂です。幼なじみだった当時の市長から依頼を受け、焼け野原となった故郷に人々が集う、民主主義の象徴となるような空間を作ろうという思いでした。

メインストリートである広小路を軸に、相対して配置された市庁舎。そして公会堂は、広小路の道幅をとり込むような広場空間を囲んで、市庁舎とL字になるように建てられています。つまり丹下さんは、建物と建物が作り出す空間を、都市の広場としてデザインしたんです。



アシックス里山スタジアム / FC今治 代表取締役会長 岡田武史さん



スポーツ×アートが生み出す 目に見えない心の豊かさ

このスタジアムをスポーツだけでなく、“目に見えない心の豊かさ”を感じられる場所にしたいと思っています。例えば、スポーツの世界大会で日本が優勝したら『自分ももう一回頑張ろう』って思う人がいる。この価値は数字じゃ測れないじゃないですか。アートだって、絵や作品を見て感動したり、音楽を聴いて勇気づけられたり。そうやって1日が豊かになる。僕は、もう一度、弱い人も強い人もみんながインクルーシブに助け合って生活していけるコミュニティを作りたい。物質的な豊かさを追求しなくても、文化的な豊かさで幸せに生きていける。アートの力も借りながら、スタジアムをそういう場所にしたいです。

